呪いのドールズ！

カッパ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪いのドールズ！

【Ｎコード】
Ｎ３１９０Ｚ

【作者名】
カッパ

【あらすじ】
世界に各地に存在する呪いの人形。
ある日、ドールショップを営む少年のノアの前に現れた少女ソニア。
彼はその出会いをキッカケに、彼女と共に旅へと出る。
行き先々で巻き起こる呪いの人形とソニアを中心とした数々の事件。
ノアはそん中、徐々にソニアとそれに関わる者たちの秘密。世界の危機に直面していく・・・。

『開幕』（1）

町外れの森の奥地。木の葉と葉の隙間から溢れた月明かりが照らす、開けた獣道。そこに佇むのは不気味な雰囲気すら漂う、古い大きな館。

森で静かに眠っていた鳥たちが、館から響く銃声に驚き、一斉に木々を離れ、星空へと飛び立っていく。

天井にはシャンデリア。部屋の中心に置かれた豪勢なベッド。

寝室の済に追い込まれていたのは白髪の一人の老婆。その老いたシワだらけの手で押さえる肩からは赤い鮮血が腕をつたって流れ、上質なグレイの絨毯へと染み込んでいく。

「あの子はどこだ・・・？」

老婆を見下ろす白い紳士服に身を包んだ男は問う。その目は鋭く老婆を睨みつけ、右手に握り締めた、黒い光沢を持つリボルバー式の銃の銃口は老婆の額に向けられる。

「答えるわけには行けないねぇ・・・」

額から大量の汗を流し、苦しそうに声を震わせながら、そう強気に言い返す老婆。それを聞いた男は表情を歪ませると、銃口を老婆の

右足へと向け、躊躇いもなく人差し指で引き金を引く。
銃声が鳴り響くと共に老婆の叫びが館中にに響き渡る。だが、この屋敷のどこにも人はいない。

「ふざけるな・・・」

今にも意識が消えそうなほどに弱った老婆の首したから突き上げるようにして銃を構えた男は身をかがめ、ゆっくりと、念押しに告げる。

「お前は俺を裏切り、それだけでは物足りずあの子を奪った・・・！たとえ、もと師であろうと許せない！」

「・・・ふっ　だったら・・・殺すがいいさ・・・そのほうが私も楽になるよ・・・」

その一言が、男の表情をさらに歪める。

上唇を強く噛み、男はゆっくりとその引き金を引く。

銃声が鳴り響き、飛び散った赤く澱んた血は男の顔、服に飛び散り。一瞬にして息を絶った老婆は壁を吊たるようにして床に横たわる。

息を荒げながら老婆の屍を見下ろす男は、脚を震わせながら寝室の済に置かれたクローゼットへと近づき開くと、中から黒い木製の手

提げケースを取り出し。それを手に寝室を後にした。

寝室を抜けると続くのは、窓もない、広い殺風景な廊下。そこをしばらく進んだあと、男は何かを思い出して脚を止めると、確信したかのような笑みを浮かべた。

「あの少年・・・そうか、考えたな」

男は身をかがめ、手にしたケースを開くと、その中から大きさが割に合わない2メートルほどの高さの人形を取り出し、床に寝かせる。

人形の体は茶色く、まるで陶器のような見た目。

その顔は、目を表現して空けられた、均等な丸い穴が二つだけというシンプルなもので、穴のなかは空洞で。全体的にハニワに似ていた。

「泥人形・・・俺がお前の主人だ」

男のその言葉にしばらくして人形は独りでに立ち上がり、男を見下ろすようにして首をかしげる。

「命令だ、アフリン・オリバスの孫を探し、俺の大切なあの子を取り戻してこい。孫が抵抗した場合は殺しても構わない・・・」

男の命令に泥人形はしばらくして小さく頷くと、背を向けて屋敷の闇の中へと姿を消していった。

『開幕』（2）

小さな町。石畳が７００メートルにわたって敷かれ。それを左右挟むようにして多くの店が連なる大通りは、それなりの人で賑わっている。

そんな大通りの店の中でも一際は目立つ一件の古い建物。

瓦張りの黒いトンガッタ、高い屋根の平屋建てで、表の壁の一部はガラス張りになっているため、中を表から覗けられるようになっている。

店の名前は「オールド。」

レトロな雰囲気ただよう店内に置かれていたのは多くに人形。ヒト形のモノから動物を象ったヌイグルミまで、多種が種別で綺麗に棚やカゴの中に陳列されている。

「またお越しください」

猫の小さなヌイグルミを抱きしめた、５歳ぐらいの女の子が父親に手を引かれ、店を出て行く。その後ろ姿を見送るのは一人の茶髪の少年。歳は１７ほどで、灰色の使い込まれたエプロンを私服の上から纏う。

少年は親子の姿が見えなくなったのを確認すると、店の奥に作られた小スペースへと移動する。

そこは長細い机を四方向に囲んだだけの素朴なもので、その上にはレジと少年愛用の一冊の小説が置かれていた。

「さて、続きつづきと・・・」

待ちかねたように小説を手にして椅子に座り、栞を挟んでいた場所から読み出す少年。だが、すぐにまた、新しいお客が訪ねてくる。

出入口の扉が開くと同時にその上に取り付けられたベルが揺れ、店内に鳴り響き渡り。それを聞くと、残念そうに本を閉じ、机と机の間から少年は渋々小スペースの外へと出て行く。

「いらっしゃい・・・って母さんか」

扉を開けた入ってきたのは、大きな紙袋を両手で抱え、カスタード色のエプロンを身にまとった茶髪のセミロングヘアーの女性。少年は「母さん。」と呼んだが、その歳は見た目３０歳後半ほどと、若々しい。

「ノア、これ持って・・・重い・・・」

震えた声に少年ーーーノアは手を伸ばし、女性から紙袋を受け取ると、軽々とレジ台の前まで持っていき、その上に置いた。

「ありがとう、母さんもう歳かな？」

「その歳で、音を上げてたら将来が心配だよ・・・」

呆れたように小さくため息をつくノアの横で母親は明るい笑いを浮かべていると、再び店のベル。呼び鈴が店内に響き渡る。

「いらっしゃいませ～」

反射的にノアは入口の方を振り返ると、そこに立っていたのは黒い執事服に身を包んだ一人の中年の男。無愛想な表情で彼を見つめ、一礼すると、上着の内ポケットから一通の封筒を取り出した。

「ノア・オリバス様ですか・・・？」

封筒の表に小さく書かれた宛先の名前を確かめるように読み上げると、ノアは小さく頷いた。

男はその封筒をノアに手渡すと、一度外へと出る。するとそこには黒い立派な馬が繋がれた、一台の大きな馬車が歩行者の邪魔にならないよう、店側に寄せるように止められていた。

男は馬車の中から抱えるようにして大きな黒いケースを取り出して

くる。トランペットのケースに似ているが、その素材は木製。大きさは、縦８０センチ、横２メートルとかなり大きい。

「アフリン・オリバス様からのお届け物です・・・」

「祖母からの？」

男の口から告げられた名前に聞き覚えがあるのか、少年は少し驚いた表情を見せる。

ケースを床に置き、足早に去っていく男は店を出て行くさい振り返り一礼すると、馬車の前席に乗って轡を手にし、張りのある掛け声をかけて、それをしならせる。すると馬は軽快な足取りで軽々と馬車を引き、街の大通りを駆けていく。

「・・・婆さんからの」

目の前に無造作に置かれたケースを見つめながらノアは手にした封筒を開き、中から細く折りたたまれた一通の手紙を取り出すと、拡げて内容の文章を目で追って確認する。

―ノア・オリバス氏へ―

これは手紙としてはなく、遺書として受け取れ。
これを読んでいる頃、私アフリン・オリバスはこの世には居ないであろう。
カネ、土地、我が財産は全てお譲りする、好きに使うがいい。だが、この手紙と共に送られてきたモノはけして他者に渡すではない。これは私の最初で最後の頼みである。

―アフリン・オリバス―

「遺書、いないって・・・お母様は・・・？」

少年の後方から覗き込んで手紙を読んだ母親が顔色を変え、焦った様にソワソワしだす。だが、ノアは落ち着いたまま。手紙を封筒へと戻して身を屈め、ケースへと恐る恐る手を伸ばした。
ケースを固定した幾つもの金具を外していき、最後のひとつが外し終わると、蝶番が軋む音を立てて、ケースは独りでに開き出す。

「・・・なっなんだコレ！？」

全貌が明らかとなったケースの中身に思わず言葉を失う少年とその母。その中身は予想外のモノだった。

小柄な図体に黒いフリルドレスを纏。長く伸びた綺麗な銀髪に後頭部には大きな青いリボンを飾り、その手には三頭身の黒いウサギのヌイグルミが抱かれている。

一目見て思い浮かべるのは可愛らしい人形。だが、そこに横たわっていたのは一人の少女であった。

「ノア、女の子よね？」

「ああ、でも生きてるのか？」

恐る恐る顔を寄せると、小さな可愛らしい寝息が聞こえてくる。どうやら眠っている様だと、ノアと母親は胸をなでおろした。

ノアは少女を抱きかかえて店と渡り廊下でつながった自宅の寝室へと連れて行くと、一人用のベッドの上に手にしていたヌイグルミと共に静かに寝かせる。

するとその時、店の方で再び呼び鈴が鳴り響くのが微かに聞こえてくる。

「またお客？今日は忙しいな・・・じゃあ、その子お願いしたよ」

少女の面倒を母親に任せ少年は店の方へと出ていく。

「いらっしゃいませ・・・？」

店の入口に立ち尽くしていたのは丈が2メートルはあろう黒いコートで身を隠した謎の人物。その顔はフードの影になって確認することはできない。

「今日はお子さんのお見上げですか？」

「・・・」

黙り込んで動かないフードの人物。素顔は見えないが、彼は睨まれているような不気味な視線を感じていた。

怪しく思って恐る恐る近づいていき、その体を見上げる。すると、フードの中に見えたのは人ではない、まるでハニワのような無表情の顔。

それに驚いたノアは慌てて引き返そうとしたが、長い腕がフードの隙間から素早く伸び、そのザラついた手で、彼の首をつかみあげた。

「ぐっは、離せっ！？」

ジタバタと抵抗するが、その握力は強く、逃れることができない。やがて徐々に意識は遠くなっていき、ノアは最後を覚悟した。

だがその時、後方から母親の驚いた様な声が聞こえ、しばらくして宙吊りになった彼の横を黒い小さな何かが通過すると、勢い良くフードの人物に体当たった。

衝撃で少年はその腕から逃れ、フードの人物はガラスを突き破って大通りの真ん中に倒れ込む。

「なんだ、喧嘩か？」

ちょうどその場を通りかけた人々が集まり、人ごみが出来上がる。

「ああ、警察をって・・・お、おいっ！？」

しばらくして起き上がったフードの人物。するとその時、フードが落ち、その内側の全貌が露となった。

茶色い陶器の体にハニワのような無表情の顔。それは人ではない。化け物、もしくは泥人形とも呼べる姿だ。

「ば、化け物！？」

その醜い姿に驚いた人々は慌てて逃げて行くと、視界が開け。泥人形の視線は店内でフラつくノアをターゲットに絞ると、勢い良く石畳を蹴り上げて店の中へと突進してくる。

「くそっからだが・・・っ」

ノアは酸素不足で視界がボヤけ、千鳥足で避けようにも避けることは出来ない。だが、そんな彼を守るようにして、前方に飛び上がったのは黒いウサギのヌイグルミ。それは先ほどまで少女に抱かれていたものだった。

ウサギはその、６０センチほどの小さな図体に似合わないほどの力で泥人形を受け止めると、再び外へ押し返す。

「ウサギ・・・？なんでヌイグルミが独りでに？」

首をかしげる少年の元へと、小さな歩幅で駆け寄るウサギのヌイグルミ。その一生懸命にも見える姿は妙に彼の心を和ませた。

ウサギは高く飛び上がると、少年の手のひらの上へ着地する。するとその瞬間、ウサギのヌイグルミから黒い刃を持つ、一本の太刀へと粘土様に姿を変える。

「これ・・・剣？」

それを見た瞬間、少年の脳をよぎる古い記憶。それに後押しされるようにして、彼はそれを無意識に手にとった。

（ドクン・・・ドクン）と、一定のテンポで太刀から伝わる不思議な鼓動。暖かく激しいそれは少年の心臓の鼓動とシンクロしていく。

「もう二度と握りたくなかったのよな・・・クソッ！」

寂しげにそう呟いたノアは太刀を大きく振り、構えるとその刃先を大通りに佇む泥人形へと、まるで挑発するかのように差し向けた。

泥人形はその挑発にのったのか、再び石畳を蹴り上げると勢い良く突撃してくる。だが、ノアは太刀の刃の面でそれを軽々と受け止めると、大きく振り上げて店の壁へと泥人形を吹き飛ばす。

その剣裁きはドールショップで働く少年とは思えないほど。まるで王族に仕える騎士をしていたかのような腕だ。

「・・・「他者に渡すな。」奪いにくるってことか！」

壁にめり込み、動かなくなった泥人形を見つめ、そう祖母の手紙の

一文を思い返した少年は駆け足で自宅の方へと向かい、寝室へ飛び込む。

「母さん！ここは危ないからその子を連れて逃げ・・・」

視界に飛び込んできたのは、寝室では母親が眠る少女にそっと黒い猫耳のヘアバンドを飾りつけている光景。それに唖然とすると、彼はしばらく状況を整理したあと、徐に尋ねた。

「な、なにやってるの？」

「あはは・・・だって可愛いんだよこの子！」

まるで子供のように、言い訳をする母親に冷たい視線を送る少年。それに彼女は引きつった笑いを浮かべるしかなかった。

「・・・ん？」

ちょうどその時、目を覚ます少女。ゆっくりと起き上がり、大きく背伸びをすると、見覚えのない当たり光景を見渡して首をかしげた。

「ここは、どこですか？」

徐に少女はそう呟く。それにノアは真剣な表情を浮かべると、ベッドの上でしゃがむ彼女と向かい合うようにして立つ。

「・・・あなたは、誰？」

目の前に立つ、見知らぬ男に少し不安げに少女は問う。

『開幕』（3）

「・・・あなたは、誰？」

一人用のベッドの上でしゃがみこんだ、少女の虚ろなマリーブルーの瞳が不思議そうに少年を見つめる。

少女の目の前で真剣な表情を浮かべる少年はしばらくその姿を見つめていたが、彼女の頭に飾られた黒い猫耳のヘアバンドが気になり、思わず目をそらしてしまう。

そんな彼の素振りを気にした少女は、見つめられていた自分の頭を探り、ヘアバンドを手に取ると、目の前へとそれを持ってくる。

「な、なんですかコレ？」

なぜ自分の頭の上にこんなものが乗っていたのか、困ったように目を丸め、なんども小首をかしげる少女。その横では、カスタード色のエプロンを纏った茶髪の女性が落ち着かずにアタフタしていた。

「とっちゃダメよ～」

女性は少女の手にした猫耳を奪い取ると、再び頭の上へと飾りつけ

て、納得したように頷いた。

「母さん・・・」

「だって～」

子供のような素振りを見せる母親に呆れて深々とため息をつく少年。彼はしばらくして気を取り直すと、訳も分からず呆然とする少女に近づき、尋ねる。

「あんな母さんでごめんね。僕は　ノア・オリバス。　君は誰だい？家の祖母とはどういう関係？」

少年の質問に少女も我に返る。だが、その様子はすこしおかしい。

「・・・私は、ソニア。祖母？誰・・・オリバス・・・はっ！！！」

記憶を引き出そうとした瞬間、ソニアと名乗る少女の脳内に激しいノイズと音が響き渡り。激しい頭痛に思わず頭を抱えて身を小さく丸める。

「どうしたんだい！？」

「・・・誰かが、私の記憶を邪魔する・・・どうして！」

怯えたように声を震わせてそう訴えるように呟くソニア。彼女はそのままゆっくりと気を失っていしまう。
ノアはそんな彼女を見つめ不安感を覚えると、着ていた灰色のエプロンのポケットから封筒を取り出して、その中から折りたたまれた手紙を引き出す。

「行こう・・・！」

広げた手紙をしばらく見つめた後、何かを決意したようにそう呟いた少年は部屋の壁に掛けてあったグレイのロングコートを手に取ると、エプロンを脱ぎ捨て、裾に素早く腕を通す。

「行くって、どこへいくのノア？」

「婆さんのとこ。なにかこの子のヒントとかがわかるかもしれない！」

「・・・だけど」

祖母からの手紙の一文を思い出し、暗い表情を見せる母親。それに息子は勇気づけるように優しく告げた。

「あの婆さんは頑固だからさ、こんな手紙ありえない・・・まだ生きているかもしれない。まぁ死んでも遺産が手に入るからいいけど・・・」

そう何気なくひどいことを呟いたノアだが、ベッドの上で、不安げな表情を浮かべて眠る銀髪の少女をしばらく見つめ、続けて言葉にした。

「だけど、生きていて欲しい・・・僕のタメではなく、その子のためにね」

「誰にも渡すな。」と、まるで隠すように狭いケースの中に押し詰められてまで送られてきた少女。少年はそれが祖母の一番大切なものだと感じていたのだ。

硬い地面を蹴り、軽快なリズム刻む馬の蹄。

揺れる馬車の中、少女はゆっくりと目を開く。

「ここは？」

まだ状況を理解できない彼女は、寝返って天井を見上げると、そこには自分を見下ろして優しく微笑む女性の顔があった。

少女は馬車の中、ソファーの上で横になり、その女性の膝を枕に眠っていたのだ。

「起きたかい、ソニア」

自分の名前を呼ぶ声に再び寝返ると、向かい合って置かれたもう一つのソファーに座る一人の少年の姿が見え、ソニアはその瞬間、状況を理解する。

「私・・・そうか、あの時すごい頭痛で」

まだすこし痛むのか、額を抑えて自分の倒れる瞬間までの記憶を思い返すソニア。彼女はゆっくりとその体を起こすと真横の窓から外を見つめた。

広がるのは草原。馬車はそこをそれなりのスピードで進んでいた。

「どこへ向かっているんですか？」

「君の記憶の情報を探しにね、っとっと・・・」

少年ーーーノアの肩から顔をのぞかせたのは長み二つの耳が特徴的な三頭身の黒いウサギのヌイグルミ。茶色いボタンでできた瞳で、無表情ながらもソニアを心配そうにジッと見つめている。

「ロック？ロック！？」

ヌイグルミを見つめ、何かを思い出して、確かめるようになんども名前を呼ぶソニア。それに応えるようにロックと呼ばれるヌイグルミも頷き、少年かたを軽く蹴り上げて彼女のもとへと飛びつく。

「ロック～不安だったんですよ～」

抱きあって再開を喜ぶ少女の瞳には小さな涙。

「お知り合いですか？」

隣で女性が尋ねると、彼女は小さく、それでいて嬉しそうに頷いた。

「感動の再会の途中すまんがの、もうすぐ目的の森じゃよ？」

ノアの真横の壁に取り付けられた小さな引き戸から顔を覗かせたのは、前席で馬を操る、麦わら帽子がよく似合う老人。

彼の言うとおり馬車は町外れの深い森へと入って行き、進む道は凹凸が激しくなり、急に車体は大きく揺れだす。

「あっ！」

揺れにバランスを崩したソニアはロックを抱きしめたまま、床に転倒しそうになる。だが、その瞬間、ノアが手をつかみ、優しく自分のもとへと引き寄せて転倒を阻止しする。

「ふ～大丈夫？」

ホッと一息ついて尋ねると、ノアと密着したソニアは頬を赤らめ、慌てて逃げ出すと、女性腕にしがみついて、何度も深く頷いた。

「ふふ、ノアたら～？」

「な、なんだよ母さん・・・」

怪しくニヤける自分の母親に少年は問うと。だが、彼女は答えることなく顔をそらして、しばらく嬉しそうに小さな笑いを浮かべていた。

馬車は獣道を進んで行き、突如あら荒れた巨大な鉄格子の門をくぐる。すると見えてきたのは森奥にひっそりと佇む、巨大な古い館。その前で馬車はゆっくりと停止した。

馬車を降りて伸びきった芝生の上に立ったノアは屋敷の方をしばらく見つめたあと、その扉を開けて中へと土足で踏み入れる。

訪問者を向かえたのは巨大なロビー。

天井には巨大なシャンデリア。薄暗い部屋の所々には銅像や肖像画など、価値ある美術品が並んでいるが、それらはホコリをかぶり、上品な品格を失っている。

「・・・」

ロビーを抜け、真っ直ぐと続く殺風景な廊下を進んでいくと、その突き当りの扉前で脚を止めた少年。この先が彼の祖母の寝室なのだ。

ドアノブに手を伸ばすが、不安感がよぎって引くことができない。そんなノアに後ろをついてきた母親は後押しするかのように彼の手に自分の手を重ね、一緒にドアノブを引いた。

「婆さん・・・っ！！」

開けた瞬間に漂ってきたのは鼻を突くキツイ臭い。

ノアは鼻を抑えながら寝室を見渡すと、その済に横たわる白髪の老婆の姿を見つけ、慌てて駆け寄っていく。だが、すぐに彼は脚を止めて目をそらす。

息を絶った、老婆の下に敷かれた絨毯には赤黒く澱んだ血が染み付き、強烈な悪臭を放つ。

「どうかしたんですか・・・っ！？」

部屋に入ってきた少女がその無残な死体を見るなり言葉を失い。腰から力が抜けると床の上にしゃがみこむ。するとその瞬間、彼女の脳内に忘れていた記憶たちが溢れ出し、心を震わせる。

「・・・誰？」

後方から迫る複数人の重々しい足音に入口に立っていた母親は振り返る。するとそこには、こちらへ向かって列をつくり、廊下を進行する多くの泥人形の姿があった。

「ノア！」

「・・・くそ、なんでたくさんいるんだよ！」

部屋の外へと駆け出る少年に続いてロックが後を追って飛び上がり姿を太刀へと変えと、彼はそれを手にして、泥人形たちの前で立ちふさがるようにして構える。

「くそ、こんな数どうやって・・・！ソニア！？」

フラついたおぼつかない足取りでふらっと、ノアの前へとでるソニア。その瞳には光を感じることができ無いうえに、妙な殺気を感じ、思わず一歩、ノアは足を引いた。

「アフリンを殺したのは貴方達ですか・・・？」

「アフリン？もしかしてソニア、記憶が・・・」

少女はそう泥人形たちに問うが、答えるわけも、進行が止まることもない。

「ダメだ、ソニア逃げ・・・！！」

伸ばしたノアの手を払い、目をゆっくりと閉じるソニア。彼女が次に目を開くと、その瞳は綺麗なマリーブルーから赤黒い、暗い色へと変色していた。

「×××××・・・」

両手を真横に広げて理解できない謎の言葉をソニアは呟くと、黒いフリルドレスの腕の両裾。肌と布の隙間から鋼の刃が伸びるようにして、その鋭い刃先を表す。

ソニアはその刃先を泥人形の列へと向けると、それはさらに、勢いつけて伸びていく。

二本の刃は複数の泥人形の頭部を貫通していき。動かなくなった泥人形は、その場で砂へと姿を変え、床の上に積もっていく。

「許さない・・・殺す、殺してやるぅぅぅ！！」

光の入らない廊下で、訴えるような叫びを上げるソニア。彼女はそのまま自分を中心に体ごと回転をかけ、直径１０メートルほどの二本の刃を円を描くようにして大きく振る。

「あっ危ないっ！！」

迫る鋭い刃に慌てて少年は母親を押し倒すと、それは彼の頭上スレスレを掠っていき、泥人形と共に周りの壁に深い切り傷をつけて行

く。

「死ねぇぇ！消えてしまえぇぇぇ！！」

心に溢れる大きな怒りと悲しみ。それに身を任せ、ソニアは敵味方関係なく刃を振り回し暴れる。

「・・・素晴らしい、素晴らしいよソニア・・・」

廊下の先の方から拍手の音と共に聞こえてくる男の声に手を止めるソニア。ノアも起き上がり声のする方を振り返ると、そこに立っていたのは白い紳士服に身を包んだ銀髪の男。

微笑みを浮かべ、とても優しそな雰囲気だが。その服に染み付いた赤い血にノアは疑いの視線を向ける。

「・・・その血は？」

質問混じりに太刀の鋭い刃先を向けられた男は脚を止め、目の色を変えると、服の内ポケットからリボルバー式の銃を取り出し、片手に握る。

「銃・・・？血・・・？　アフリンを殺したのは貴方！？」

ソニアの刃が男へ向けて勢い良伸びていく。

「実の父親を殺すのかい、ソニア・・・？」

男の首擦れ擦れで止まる刃。

ソニアは男の一言に驚いたような表情を見せたあと、二本の刃を縮めて袖へと隠すと、床に膝をつき、俯いて沈黙した。

男はそんな彼女を優しい気な瞳で見つめると、手にしていたリボルバーのハンマーを引き、素早く銃口をノアへと向けて発泡する。

ハンマーが弾薬を打ち付け、銃声と共に放たれた銃弾は回転を掛けながら進み、ノアの左肩を打ち抜いた。

「ノア！？」

右肩を押さえて床に膝を突く我が息子に慌てて駆け寄る母。

苦し気に引きつった表情で男を睨む少年の肩からは大量の赤い血が腕をたどって床へと垂れる。

「ああ、待ったんだよソニア・・・。この7年間お父さんはどれだ

けお前を探したか、どれだけお前を愛おしく思っていたか――――！」

ソニアの目の前まで迫った男の首擦れ擦れに太刀の刃がはいる。

「なんの真似だ、小僧・・・」

男の鋭い目線がソニア斜め後ろで膝をつく少年を睨みつけた。

「ソニアをどうするんだい？」

「連れて帰る。そして、我々家族を裏切ったこの世界に罰を下す・・・！」

男のその言葉にノアは小馬鹿にしたような笑いを浮かべると、傷口を押さえる母親を振り払い、ふらついた足でどうにか立ち上がる。そして男に向けて強気に言い放った。

「すまないけどソニアは渡せない・・・祖母との約束なんで。それに、人殺しの親なんかにこんな可愛い子をあずけたなら、絶対後悔するに決まってる！」

太刀を素早く、大きく振るノア。だが、男は鮮やかにその刃の動き

を見切ってよけると、素早くハンマーを親指で手前へ下ろし、引き金に指をかける。

「・・・！！」

引き金を引こうとした瞬間、男の目先に突きつけられる刃。少年の動きが一手上をとったのだ。

引き金から指を外し、男はゆっくりと銃を服の内ポケットへと片付けると。両手を小さく上げてゆっくりと背を後ろに下がっていく。

「さすがというか、なんというか・・・皮肉にもあのババアに似ているな、その目・・・」

ノアとの距離をとり、そう呟いた男は何かに怯えているかのようにも見える。

彼は渋々目を閉じ、指を（パチン）と鳴らす。すると、当たりに積もっていた泥人形の砂が風もないのに舞い上がって渦を巻、男を包んでいく。

「・・・また会いにくるよ」

砂嵐のなかでうっすらと不気味な笑みを浮かべた男はそう言い残し、

嵐に乗って壁を突き破ると森の奥地へと姿を消した。

それをしばらく呆然と見送ったノアは振り返り、沈黙するソニアへと近寄ると、身を屈めて優しく声をかける。

「ソニア？」

「・・・逃げて、ください・・・」

しばらく間をおいて呟いたソニアの言葉は震えている。

「私の自我が崩壊する前に・・・逃げてくださいっ！！あっ！きゃぁぁっぁぁぁぁっぁぁ！！！」

断末魔のような叫びと共にソニアの背中から服を破り、数本の刃が伸びていく。

「・・・あはは、醜い姿ですよね？この無数の刃・・・全部、人を殺すためのものなんですよ・・・？　私はもうすぐ貴方を殺してしまう・・・だから逃げて、誰も傷つけたくないん・・・です・・・あぁっ！」

震え、怯えるように告げる少女の心に逆らい、服の裾から伸びた刃はノアを目掛けて、まるで生きているかのように、変幻自在に伸び

ていく。だが、彼は逃げることもなく、その場で立ち尽くすと、足に力を込めて向かってくるその鋭い刃を右の手のひらで握り、受け止める。

「ぐっ！！」

手のひらから溢れる血。少年に走るのはとんでもなほどの激痛だ。だが、彼はその手を離さない。

「ソニア・・・っ！」

もう片方からも伸びる刃、彼はまたそれをもう一つの手で受け止めると、激痛に耐えながらも笑いを浮かべる。

「どうして・・・逃げないん・・・ですか・・・！？」

ソニアは辛そうに息を荒げながらノアに問うと、彼は当たり前のように応える。

「逃げるさ・・・だけど、一人じゃない、君も連れて行く・・・！絶対に！」

決意を胸に少年は手にさらに力を込める。

銃弾が貫通した傷跡からは血が噴出し、両手の平からもより多く血が垂れ流れていく。

「こんなものぉぉぉぉぉ！！」

歯を食いしばり、ノアは最後の力を込めて雄叫びを上げる。すると、握りしめていた刃は折れ、それと同時にソニアから生えていた無数の刃は全て、砕け散る。

「行くぞ、ソニア・・・」

少女の瞳はもとの綺麗なマリーブルー色へと戻り、そこから涙が溢れていく。そんな彼女を見届けたノアは安心したように微笑むと目を閉じ、少女のちいな胸の中へと飛び込むようにして眠りに着いた。

「・・・ありがとう・・・ございます・・・」

ー数日後ー

まだ日も登りきらない薄暗い時間。町の出入口の門前に3人の人影があった。

グレイのロングコートを私服の上から着、旅用の茶色い手提げカバンを手にした少年と、その横で黒いウサギのヌイグルミを肩に載せ、その銀髪の髪を微風に靡かせる少女。

二人を見送るようにして立つ女性は優しく微笑むと、身を屈めて少女と目線を合わせ、頭を優しく撫でる。

「ソニアちゃん、気お付けてね・・・」

「はい」

そう元気良く返事をする少女に頷いた女性は立ち上がり、今度は少年と目を合わせる。

「ノア、できればでいいわ。たまに手紙送ってね？」

「ああ、わかったよ。母さんこそ、あの男が現れたら逃げて、絶対に・・・！」

「ええ、分かっているわよ」

そう言葉を交わし終わると、ノアは母に背を向け、草原の向こうに顔を出す眩いほどの太陽の日を見つめる。

「・・・じゃあ、行こうかソニア？」

「はい、ノア♪」

二人は踏み出した、長い旅の一歩を。

朝日の日差しに飲まれていく二人の後ろ姿。それを母親は愛おしそうに、だけど期待を胸に。その姿が見えなくなるまで見つづけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3190z/

呪いのドールズ！

2011年12月11日01時52分発行